

1 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する
特別の輸入制限（二）

第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほ

ぼ全品目に対する特別の輸入制限（二）

第二部 他の原理に照らしても不合理な特別の制限について

本章前半では、重商主義の原理に立ってさえ、いわゆる貿易収支が不利と見なされる相手諸国からの輸入に特別の制限を課す必要はないことを示そうと努めた。

それにもかかわらず、商業に関する規制のうち、これらの制限だけでなくほとんどすべての根拠とされてきた「貿易収支説」ほど不合理なものはない。この説は、二つの土地が相互に交易する場合、収支が均衡していれば両者とも損得なし、いづれかに少しでも傾けば、均衡からの乖離の程度に応じて一方が損し他方が得をすると仮定する。いづれの仮定も誤りである。奨励金や独占によって無理に成立させた交易は、後に示すように、その恩恵に浴すると意図された当の国にとってさえ不利であることがあり、実際しばしばそうである。だが、いかなる強制や拘束もなく、自然に、規則正しく二つの土地のあいだで営まれる交易は、（利益の配分が必ずしも等しいわけではないにせよ）つね

に双方にとって有利である。

ここで言う「利得」とは、金銀の量の増加ではなく、国の土地と労働が年々生み出す産出物の交換価値の増大、すなわち住民の年々の所得の増加を指す。

収支が均衡し、しかも取引が相互の国産品どうしの交換で成り立つなら、ふつうは双方が利益を得るだけでなく、その利得は等しいか、少なくともほぼ等しくなる。互いに相手の余剰生産の市場となり、その余剰を市場に備えるために投下された資本が回収され、その資本の分配が一定数の住民に所得と生計を与えるからである。交換する財の価値が等しければ、投じられる資本も多くの場合等しいか、それに近く、しかもどちらの資本もそれぞれの国産品の生産に用いられるので、住民にもたらされる所得と生計も等しいか、きわめて近い水準になる。この相互に与え合う所得と生計の規模は、取引の規模に比例して大きくも小さくもなる。たとえば年々十万ポンドずつの取引であれば、双方とも相手国の住民に年々十万ポンドの所得を与えることになり、年々百万ポンドであれば、双方とも相手国の住民に年々百万ポンドの所得を与えることになる。

取引の構成が、一方は自国産のみを輸出し、他方はすべて外国産で返す形であっても、物々交換である以上、収支はなお均衡と見なされる。ただし、双方の利得は等しくはな

3 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する特別の輸入制限（二）

らない。自国産だけを輸出する側に、より大きな収入が落ちる。たとえばイングランドがフランス産品だけを輸入し、フランスに通用する自国産がないために、たばこや東インド産品などの外国品で支払うとしよう。この商いは双方に収入をもたらすが、その配分はフランスに厚く、イングランドに薄い。というのも、フランスでは当該取引に投じられた資本の全額が国内に分配されるのに対し、イングランドでは、外国品の代価となる自国産品の生産に投じた部分だけが国内に回り、残りはヴァージニアやインドスタン、中国など遠隔地に投じられて、それらの地の住民の所得と生計を支えるからである。資本規模が同等であればなおのこと、フランス側の資本はフランス住民の収入を、イングランド側の資本がイングランド住民の収入を押し上げる度合いより、はるかに大きく増やす。この場合、フランスはイングランドと直接の消費貿易を営み、イングランドはフランス相手に迂回の消費貿易を営んでいるのであり、両者における資本の効き方の違いは、すでに述べたとおりである。

もっとも、実際には、どの二国間の取引も、双方が自国産のみを交換する、あるいは一方は自国産のみ・他方は全面的に外国産といった純粋な形で成り立つことはほとんどない。ほとんどの国は、自国産と外国産を取り交ぜて交換している。そのうえで、輸出

貨物に占める自國產の比率が高く、外國產の比率が低い國ほど、つねにより大きな利得を得る。

もしイングランドが、フランスからの年々の輸入代金をタバコや東インド產品ではなく金銀で支払ったとしても、この場合は物々交換ではないという理由で、見かけの収支は「不均衡」とされるだろう。それでも、この取引は先の事例と同様、兩國の住民に収入をもたらすが、その配分はやはりフランスに厚く、イングランドに薄い。イングランドにとっても収入が生じるのは、金銀を調達するために国内で生産された財に投じられ、住民に分配されて所得を与えた資本が、この取引によって回収され、同じ雇用を継続できるからである。金銀の輸出は、同額の財貨の輸出と同様、國の資本を減らさない。反対に、多くの場合それを増やす。そもそも輸出されるのは、海外のほうが国内より需要が強い品であり、その見返りは国内で輸出品より高く評価されるからである。たとえば、英国内で十萬ポンドの価値しかないタバコが、フランスでワインに替わって英国内で十萬ポンドの価値となるなら、この交換によりイングランドの資本は十萬ポンド増える。同様に、英貨の金十萬ポンドでフランスのワイン（英国内で十萬ポンドの価値）を買えたなら、資本増はやはり十萬ポンドである。地階に十萬ポンド相当のワインを持つ

5 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する
特別の輸入制限（二）

商人は、十万ポンド相当のタバコしか倉に持たない者よりも、また十万ポンド相当の金を手許に持っただけの者よりも、富んでいる。より多くの産業を動かし、より多くの人びとに所得・生計・雇用を与えられるからだ。国家の資本は住民各人の資本の総和であり、年々維持できる産業の量は、それら資本が支え得る量に等しい。ゆえに、この交換は概して、国家の資本と年々維持できる産業量の双方を増やす。いうまでもなく、イングランドがフランスのワインを、ヴァージニアのタバコやブラジル・ペルーの金銀ではなく、自国の金物や広幅毛織物で買えるほうが望ましい。直接の消費貿易は、いつでも迂回のそれより有利だからである。しかし、金銀を媒介にした迂回の消費貿易が、同じく迂回である他のやり方に比べて不利だとは見えない。鉱山のない国が毎年金銀を輸出したからといって、タバコを作らない国が毎年タバコを輸出するのと比べて、金銀が枯渇しやすくなるわけでもない。タバコを買う力がある国が長くタバコに不自由しないのと同じく、金銀を買う力がある国も、金銀に長く不自由することはない。

金銀の輸出は、同額の財貨の輸出と同様、国の資本を減らさない。むしろ多くの場合、それを増やす。輸出されるのは海外での需要が国内より強い品に限られ、その見返りとして得る品は、国内において輸出品より高く評価されるからである。たとえば、英国内

での評価額が十万ポンドのタバコをフランスとの交換によって、英国内で十一万ポンドと評価されるワインに替えれば、資本は一万ポンド増える。十万ポンドの金で同額（英国内評価で十一万ポンド）のワインを買っても、増分は同じである。十一万ポンド相当のワインを保有する商人は、十万ポンド相当のタバコや金しか持たない商人よりも富み、より多くの生産を動かし、より多くの人びとに所得・生計・雇用を与えうる。国家の資本は住民各人の資本の総和であり、一年に維持できる産業の規模は、その資本が支えうる規模に等しい。ゆえに、この交換は概して、国家の資本と産業を維持しうる力の双方を押し上げる。

もちろん、英国産の金物や広幅毛織物でフランス産ワインを直接購入できるに越したことはない。直接の消費取引は、同じ内容の迂回取引より常に有利だからである。ただし、金銀を用いる迂回型の消費取引が、他の種類の迂回取引に劣るわけではない。さらに、鉱山のない国が年々金銀を輸出しても、そのためにたちまち枯渇するわけではない。タバコを栽培しない国でも買う力があれば困らないのと同様、金銀を購入する力がある国は、金銀に窮することはない。

職工が酒場と取引するのは損だと言われる。そして、製造業の国がぶどう酒の国と自

7 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する
特別の輸入制限（二）

然に行う取引は、それと同じ性質のものだとも言われる。これに対して私は、酒場との取引が必ずしも損ではないと答える。それ自体としては、ほかのどんな取引と同じく有利であり得る（多少悪用されやすいところはあるにせよ）。醸造業者の仕事も、醸造酒小売人の仕事も、ほかのどんな部門にも劣らぬ分業の一つである。職工にとっては、必要分の酒を自分で醸すより、醸造業者から買うほうが一般に有利であり、貧しい職工であればなおさら、醸造業者から大量に買うより小売人から少しづつ買うほうが有利である。もつとも、彼はどちらからも買い過ぎることがある。隣の肉屋から、食いしん坊なら肉を買い過ぎるかもしれない、仕立屋から、仲間内で伊達を気取るなら服を買い過ぎるかもしれないのと同じである。とはいえ、これらの商売がみな自由であることは、悪用されうるにもかかわらず、そしておそらく部門によってはより悪用されやすいにもかかわらず、職工全体にとって有利である。個々人は、醸造酒の過度の消費で身代を潰すことがときにあるとしても、国全体がそうなる恐れはない。どの国にも、酒に身分不相応に費やす者はいるが、それより少なく費やす者のほうが、常に多いからである。経験に照らして言えば、ワインの安さは酩酊の原因ではなく、むしろ節制の原因に見えることも付け加える価値がある。ワイン産地の住民は、概して欧州でもっとも節度ある人びと

である。スペイン人、イタリア人、そしてフランス南部の人びとを見ればよい。日々の糧として口にするものでは、人はめったに度を越さない。小麦ビール並みに安い酒を湯水のように振る舞って、「気前のよさ」や「社交家ぶり」を誇ろうとする者はいない。反対に、暑さや寒さが過ぎてぶどうの育たない国々、したがってワインが高価で珍品である国々では、北方諸国や熱帯の諸民、たとえばギニア沿岸の黒人のように、酩酊はありふれた悪徳となる。フランス北部の、ややワインが高い地方から、ワインが非常に安い南部に連隊が移駐すると、着任当初は良酒の安さと物珍しさに耽溺するが、数か月もすると大半は土着の住民と同じく節度ある飲み方に落ち着く（と私はしばしば聞いてきた）。もし外国産ワインへの関税と、麦芽・ビール・エールへの物品税を一挙に撤廃すれば、同じことがグレートブリテンでも起き、当座は中間層以下のあいだでかなり広範な一時的酩酊がみられるかもしれないが、おそらくその後には、恒常的でほとんど普遍的な節酒が続くだろう。いまや酩酊は、最も高価な酒を容易に買える階層や、いわゆる流行人の悪徳では決していない。エールで酔いつぶれた紳士など、ほとんど見かけない。そもそもブリテンのワイン取引に対する制限は、人びとを、言わば「酒場に行く」ことから遠ざけるためというより、最も良くて最も安い酒を買える場所へ行くのを妨げるた

9 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する
特別の輸入制限（二）

めに設けられているように見える。それはポルトガルとのワイン取引を優遇し、フランスとのそれを抑圧する。ポルトガル人のほうがフランス人よりもわが国製品の上得意だ、ゆえに彼らを優先的に奨励すべきだ、というわけだ。彼らがわたしたちに顧客として寄せてくれるのだから、わたしたちも顧客として彼らに寄せるべきだ、と。こうして、下回りの小商人のこそこそした手練手管が、大帝国の統治指針たる政治原理にまで格上げされる。しかし、主として自分の得意先を雇うことを「鉄則」とするのは、もっとも低位の商人に限られる。大商人は、いつでも、どこよりも安く良い品を買うのであって、その種の些末な利害に頓着しない。

この種の金言めいた教えによって、諸国は、自国の利益とは隣国を貧しくすることにすると仕込まれてきた。各国は、取引相手の繁栄をねたましく眺め、相手の利得を自国の損失とみなすようになった。本来、個人のあいだでそうであるように、諸国のあいだでも結束と友誼の絆であるべき通商は、いまや不和と敵意の最も肥沃な源泉に変わってしまった。今世紀および前世紀に限って言えば、国王や大臣の気まぐれな野心が欧州の平穩に与えた打撃は、商人や製造業者の思ひ上がった嫉妬のそれを上回ったわけではない。人類の支配者の暴虐と不正は古くからの災厄であり、残念ながら人間社会の性質上、

これに効く処方箋はほとんど望みがたい。だが、商人と製造業者の卑小な貪欲、独占の精神は、矯正は難しくとも、彼ら自身以外の誰の安寧も乱さぬように予防することは、ごくたやすい。

この学説を最初に考案し、広めたのが独占の精神であつたことは疑いようがない。そして、それを初めて教えた者たちは、それを鵜呑みにした者たちほど愚かでは決してなかった。どの国でも、人民大多數の利益は、必要なものを最も安く売る相手から買うことにこそ常に、そして必然的に存する。この命題はあまりに明白で、わざわざ論証するのが滑稽に思えるほどだ。これに疑いが差し挟まれたのは、商人と製造業者の利己的な詭弁が人々の常識をかく乱したからにほかならない。この点で彼らの利害は、人民大多數の利害と正面から対立する。会社（同業組合）の自由民が、住民が自分たち以外の職人を雇うのを妨げることを利するのと同じく、各国の商人と製造業者は、国内市場の独占を自分たちに確保することを利する。こうして、英国をはじめ欧州の多くの国で、異国商人の輸入するほとんどすべての品に特別の重税が課され、自国品と競合しうるすべての外国製造品に高関税や禁輸が設けられた。さらに、いわゆる貿易収支が不利だと見なされる国々（言い換えれば、国民的敵意がとりわけ激しく燃え上がっている国々）か

11 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する特別の輸入制限（二）

らのほとんどあらゆる種類の財の輸入に、特別な制限が加えられることになったのである。

近隣の富は、戦争や権力政治では脅威となり得るが、通商においては確かな利をもたらす。平時の交易では、相手が富むほど高い価値で取引でき、わが国産品（またはその対価で得た品）の有利な市場が開ける。裕福な個人が近隣の職人にとって上客であるのと同様、豊かな国も上客である。富裕な製造業者は同業者には強敵だが、地域全体としてはその支出が市場を厚くし、値下げ競争を含めても、なお恩恵が勝る。豊かな国の製造業も周辺にとっては手強い競合相手だが、その競争は大多数の消費者の利益となり、その国の巨額の支出が他の多くの分野で市場を潤す。身を立てようとする者が辺境ではなく首都や商業都市を目指すように、国家も隣国の富を、自国の富を増す呼び水と見るべきだ。対外交易で富もうとする国は、周囲が富み、勤勉で、商業に長けた国々であるほど成功の公算が大きい。周囲を貧しい辺境社会に囲まれた大国は、自作農と内需では富み得ても、外貿では富みにくい。古代エジプトや現代中国の富はその類型に当たり、前者は対外交易を軽んじ、後者はそれに対する法的保護すら洩るほどに蔑視してきたとされる。隣国の貧窮化を狙う近代の通商原理は、狙いどおりに作用すればするほど、肝

心の交易を瘦せ細らせ、価値を減ずるだけである。

重商主義の教義に従った結果、英仏間の通商は長く相互に抑え込まれてきた。だが、商人の嫉妬や猜疑心、国民感情を脇に置いて実利で見れば、両国の取引は互いに最も有利になり得る。理由は近接性にある。イングランド南岸とフランス北・北西岸の航路なら、年四〜六回の資本回転が見込め、同じ資本で他の対外取引の四〜六倍の産業を動かし、同じ規模の資本で四〜六倍の雇用と生計を生む。遠隔の港を相手にしても年一回の回転は確保でき、多くの欧州向け取引に劣らない。北米植民地との交易は、回転が三〜五年に一度にすぎず、効率は少なくとも英仏直行の三分の一である。市場規模でも、フランスは約二千四百万人と豊かで、植民地の最大約三百万人の八倍に当たる。ゆえにフランスは規模で八倍となり、回転の優位も加えれば二十四倍、植民地より有利な販路を提供し得る。逆向きでも同様に、英国の市場はフランスにとってフランス植民地よりはるかに優れている。両国が抑えてきた交易と、最も寵愛してきた交易のあいだには、これほどの開きがある。

本来なら両国にとって自由で開かれた通商をいっそう有利にするはずの事情こそが、その通商の最大の障害になっている。隣り合うがゆえに両者はしばしば敵対関係に立ち、

13 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する特別の輸入制限（二）

互いの富と勢力は相手にとっていよいよ脅威となる。友好の利点を増すはずの要素が、かえって国民的憎悪の炎をおおるのである。両国はともに富み勤勉で、互いの商人や製造業者は、相手の技量と活気との競争を恐れる。かくして商業的な嫉妬が掻き立てられ、それは国民的憎悪の激しさを強め、またその激しさからいつそう煽られる。両国の商人は、利害にまみれた虚言に満ちた熱っぽい口調で、自由な通商がもたらすと称する逆差ゆえに、相手との取引がそれぞれ自国の破滅を必然にする、と触れ回ってきた。

ところが、欧州のあらゆる商業国について、この学説の自称「權威」たちは逆差を理由に差し迫った破滅をしばしば予言してきたものの、彼らが不安を煽り、ほとんどすべての交易国が自国有利に差額を傾けようと空しい努力を重ねたにもかかわらず、この原因で貧しくなった国はひとつとして見当たらない。むしろ、港をすべての国に開いてきた町や国は、その自由貿易によって、商業体系の原理が予見した破滅どころか、富を増してきた。欧州には、いくつか自由港の名に値する町はあるが、その名に値する国はない。最もそれに近いのはおそらくホラントだが、なお理想からは遠い。それでもホラントは、国の富のすべてを、のみならず必要な生計の大部分を、対外貿易から得ていることは衆目の一致するところである。

貿易差額とはまったく別の、もう一つの差引がある。しかもそれこそが、順風か逆風かに応じて、各国の繁栄か衰退かを必然的にもたらしめるものである。すなわち、年々の産出と消費のバランスである。すでに述べたとおり、年々の産出の交換価値が年々の消費のそれを上回るなら、社会の資本はその超過分に依りて毎年増加する。この場合、社会は歳入の範囲内で暮らしており、その歳入から毎年節約された分は自然に資本に付け加わり、年々の産出をいっそう増やすように投下される。反対に、年々の産出の交換価値が年々の消費に及ばなければ、社会の資本はその不足分に依りて年々減耗する。この場合、社会の支出は歳入を超過し、必然的に資本を取り崩すからである。ゆえに資本はやがて減耗し、それとともに、その産業の年々の産出の交換価値もまた減少せざるをえない。

この産出と消費のバランスは、いわゆる貿易差額とは全く別物である。対外取引をいっさい持たず、世界から完全に隔絶された国においても成立し得るし、また地球全体についても成立し得る。その富・人口・改良が、徐々に増加しているのか、あるいは徐々に衰退しているのかは、このバランスのあり方によって決まるのである。

生産と消費の差引は、いわゆる貿易差額が通例として自国不利であっても、つねに自

15 第三章 貿易収支が不利と見なされる相手国からの、ほぼ全品目に対する特別の輸入制限（二）

国に有利であり得る。ある国が半世紀にわたって輸入超過であり、その間に流入する金銀がことごとく直ちに国外へ送られ、流通貨幣はしだいに減り、種々の紙貨がそれに代わり、主要な取引相手に対する負債までも漸増していくことがあっても、その同じ期間に、その国の実質的な富、すなわち土地と労働の年々の産出の交換価値が、はるかに大きい割合で増大している場合がある。現下の騒擾が始まる以前の北米植民地の状態と、それらがグレートブリテンと行っていた通商は、この想定が決して不可能でないことの証しとなる。